

●東洋大学校友会学生研究奨励基金授与論文概要

## 現代の出産・子育てにおける助産師の役割 —乳幼児をもつ母親と助産師への調査より—

平成17年度 社会学研究科福祉社会システム専攻  
2年 3570030010番  
唐田 順子

学位の種類：修士（社会学）／学位論文審査員：主査 森田明美／副査 中里至正

### 【論文要旨】

#### 1. 研究の動機と目的

現代の出産・子育ての環境は、母親の「育児不安」の蔓延、児童虐待の増加という状況をみると、国が子育て支援対策を講じても子育ての困難性は軽減していないという状況だといえる。厚生労働省の児童虐待死亡事例の分析結果では、0歳児、特に3ヶ月以内の児の死亡例が半数を超えること、防止のために支援が必要となりやすい要素に「育児不安」が多いことが明らかになった。このことは、母親に対する妊娠中や産後早期の支援の必要性を示唆している。助産師は子育てのスタートから携わる専門家として、この役割を担うのにふさわしい人材であるといえる。しかし、子育て支援における助産師の現行の活動の問題点や、専門家としてのサポートの内容等は十分に明らかにされていない。そこで今回、八千代市での乳幼児をもつ母親の質問紙調査・インタビュー調査、八千代市近郊の病・産院の助産師への調査の3つの調査を行い子育て支援を見据えた助産師の役割を明らかにし、役割を遂行するための具体策を検討する。

#### 2. 論文の構成

第1章では、保健・労働統計や子育て支援策の変遷を整理することで、出産・子育ての変化と現代の特徴を明らかにする。第2章では、助産師の活動の歴史と現代の助産師の活動の現状と指摘されている今日の問題について述べる。第3章では

先行研究をレビューし、本研究の位置づけを行う。第4章では、八千代市での乳幼児をもつ母親を対象とした質問紙調査を分析し、現代の出産・子育ての実態とサポートニーズと支援についての考察を行う。第5章では八千代市での乳幼児をもつ母親のインタビュー調査を分析し、（妊娠・出産期の）専門的サポートの実態、出産後1ヶ月の時期の実態を明らかにし、それに対する支援を考察する。第6章では、八千代市近郊の病・産院での質問紙調査の分析を行い、病・産院での支援の実態と助産師の役割意識を明らかにし、子育て支援に向けた取り組みに対する現状と課題を明らかにする。第7章は総合考察と位置づけ、3つの調査をもとに現代の出産・子育てにおける助産師の役割を明らかにする。

#### 3. 結果

2つの母親調査と病・産院調査の結果をもとに、以下の点が明らかになった。

1) 妊娠期における母親の状況 (1) 母親の悩みや不安に「身体的不調」、「妊娠・出産の不安」、「情報不足」、「子育てイメージ困難」等が挙がっていた。これは、出産に関する知識の不足やそれに伴う判断や対応の困難性によるものであり、妊婦健診を受診しても知識の不足が生じている状況であることを示している。(2) 「仕事」をすることは多くの不安や悩みを発生させていた。特に、友人作りや知識・情報収集に関して障害となって

いることは危惧される。(3)「病・産院選び」が困りごと・悩みごとの上位に位置していた。妊娠・出産を機に退職し地域との交流をスタートさせる状況であった。(4) 妊婦健診に、「流れ作業のよう」「事務的」といった、【相談できない雰囲気】を感じていた母親が半数程度おり、妊婦健診でのサポートが実感できなかった人も約3割いた。

## 2) 病・産院入院中から出産後1ヶ月くらいの時期

の母親の状況 (1) 入院中の病・産院の「母乳(授乳)や育児に対する指導や援助」の満足度が60%代と低く、「不満」を感じた入院中の指導や援助は、①指導・援助の不足、②指導・援助の不足による不安や戸惑い、③指導・援助の不足による不適切な自己対処、④指導の過剰、⑤指導の一貫性のなさ、⑥不適切な指導・援助、⑦合併症の発生、⑧看護者の不適切な態度、⑨母親の提案や希望の却下、⑩看護体制の問題、⑪他者と比較しての劣等感を感じやすい環境、の11の状況であった。(2) 「退院後の相談場所や子育てに支援に対する情報提供」に対する満足度が低く、実際、情報提供がほとんど行われていない状況であった。(3) 出産後1ヶ月の期間の困りごとや悩みごとでは「母乳」「新生児の生活リズム」「子どもの健康や病気」が上位であった。(4) 出産後1ヶ月の時期を、母親たちはこれまでの育児の期間の中で「最もつらい時期」としていた。その実態は、①サポート不足、②子どもの問題、③閉塞感、④祖父母からのストレス、⑤子育ての心配ごと⑥子育てのイメージギャップ、⑦産科的身体の不調、⑧母親の不安、の8つの因子が複合的に絡み合い、それによって、「寝不足」や「疲労の蓄積」という「身体的不調」や「落ち込んでどん底のようだった」といった「精神的に不安定な状況」に陥っていた人が多かった。

## 3) 病・産院の支援の現状と助産師の役割意識

(1) 妊娠期の支援：妊婦健診での相談や指導の実態は、「適宜話を聞く」という体制が70%で、相

談時間の確保ができていたのは40%であった。主な相談者は「助産師」60%、「医師」30%で、母親調査では「医師」60%と、結果のズレが認められた。分娩に対する情報提供は、母親学級を通じて行われる場合がほとんどであった。(2) 出産後の支援：「母乳(授乳)や育児に対する指導」は100%実施されていた。母親調査では【指導・援助の不足】を語った人が3割程度おり、結果のズレが認められた。(3) 退院後の相談場所や、子育て支援に関する情報提供の実態：「退院後の相談場所の情報提供」は60%、「子育て支援に関する情報提供」は40%と実施状況が低かった。これに対しては【情報提供不足】を意識しており、その原因として【業務の多忙】【継続性のなさ】【努力不足】【地域の情報不足】等が述べられていた。(4) 助産師の役割意識：「妊婦健診」「母親学級」「分娩期」「産褥期」の4つの場面で最も役割を發揮していると答えたのは、「分娩期」84%、次いで「産褥期」83%で、「妊婦健診」は53%と低かった。妊娠期における助産師の役割意識は、「分娩へ向けての相談・指導」「出産準備教育」が高く、「友だち作りやサポートネットワーク作り」は低かった。産褥期における助産師の役割意識は「母乳哺育」に関するものが高いが、退院後の状況に対する予備的な指導や援助に対する意識が低かった。また、「子育て支援に関連する援助」の役割意識が低かった。

## 4. 考察

### 現代の出産・子育てにおける助産師の役割

#### 1) 助産師による支援・援助の問題点

調査3を中心に分析した結果、助産師による支援・援助の問題点は、以下の4点である。

(1) 入院中の母子の状況への指導や援助が中心で、退院後へ向けての指導・援助の意識が薄い。

(2) 子育て支援への役割意識が低い。

(3) 助産師自身が地域の子育て支援に関する情報

を持っていない。

(4) 以上の問題点によって、入院中のケアと退院後の子育ての分断が生じている。それに助産師は気づいていない。

## 2) 現代の出産・子育てにおける助産師の役割

### (1) 妊娠・出産に対して、母親自身が判断や対処ができるような知識・情報を提供すること

定期的に妊婦健診を受診していても、母親たちは「身体的不調」、「出産に対する不安」「子育てに対するイメージができない」といった悩みや不安を持っていた。それに対して、先輩ママさんからのアドバイス等の指導を工夫することで具体的なイメージ作りや知識・情報の伝達が行えるように、指導方法を工夫する必要がある。また、妊婦健診の場が相談しやすい雰囲気だったと、評価されるような体制作りも必要である。

### (2) 入院中の母乳や育児についての指導や援助は、退院後母親自身ができるような知識・情報を提供すること、またそのための育児技術の習得を保障すること

入院中の時点の母と子の状況への指導だけでなく、退院後母親が育児を自立して行えるための基礎的な知識や情報を提供することが必要である。妊娠期同様、退院後の子育てのイメージが具体的に理解できるような工夫が必要である。

### (3) 退院後の相談場所や子育て支援に関する情報を提供していくこと

母親にとって入院期間は、長い子育てのスタート時点であり準備期間である。退院後の子育ての情報提供に最もニーズの高いこの時期を逃がさず、退院指導で退院後の相談場所や子育て支援の情報を提供していく必要がある。

### (4) 病・産院でも、母親同士の交流の場や友だち作りを積極的に行っていくこと、助産師はそのコーディネーター的役割を持つこと

働く母親は地域の母親学級への参加ができない人が多く、友人や相談者を持たないまま出産・子

育てに突入する場合も多いことが、調査によって明らかになった。病院の母親学級は自治体の母親学級より受講率が高い状況であるので、病・産院を活用して「友だちづくり」をすることは、働く母親をはじめそうでない母親にとっても友人を作る機会を増やし、子育ての不安を軽減することにつながっていくと考えられる。

### (5) 妊娠中・産後の入院中の母親の情報を判断し、ハイリスクな親子を早期発見し、地域の保健センターへの情報提供を行い、継続支援への導入を行うこと

重回帰分析の結果で夫婦のコミュニケーションが不良な場合、母方祖父母の支援が得られにくい場合、現在の子育てにおける悩みごとが多い場合、出産後1ヶ月時点でサポート不足と感じている場合は、育児不安度得点が有意に高くなるという結果であった。助産師は妊婦健診や入院期間中の関わりを通して上記の項目を情報収集し、子育ての状況が不安定になりやすい親子を早期発見し、地域の保健センターへの情報提供を行い、退院後の継続支援への導入を行っていく必要がある。

今回、新たに提言できたことは、地域で行われている子育て支援に関する情報提供の役割を担うことであった。助産師自身が積極的に地域の子育て支援の情報を入手し、医療・保健・福祉分野の縦割りといった問題を克服して母親への情報提供が行われることが望まれる。保健センターや児童福祉関係部門も、病院という情報提供の場を大いに活用して、行政サービスの広報に勤めるべきであると提言したい。

本研究は、一都市で実施された調査がもとになっており一般化には限界がある。しかし地域を限定したことで、母親調査とその地域の医療機関の支援の実態のデータを検討することができ、限界を持ちつつも意味のある結果を導き出せたと考える。本研究の課題は、病・産院サポートという専

門サポートの位置づけを探ろうと、重回帰分析を行ったが有意な関連を認めなかった。さらに分析を加えて母親にとっての病・産院サポートの位置づけについて検討していきたい。また、助産師の役割の方向性を示したにとどまり具体的な対策までは十分検討できなかった。今後取り組んでいきたい。

### 【審査および最終試験の報告】

近年、国が子育て支援対策を計画的に展開してきたにもかかわらず、子育ての困難性は軽減していないことから、支援の見直しが行われ、母親に対する新たな支援である妊娠中や産後早期支援の必要性が示唆されている。なかでも助産師は子育てのスタートから携わる専門家として、この役割を担うのにふさわしい人材にもかかわらず、子育て支援における助産師の現行の活動の問題点や、専門家としてのサポートの内容は何か等は、十分に明らかにされていない。

看護師養成にかかわっている唐田さんは、八千代市での乳幼児をもつ母親の質問紙調査およびインタビュー調査、八千代市近郊の病・産院の調査の3つの調査を行い、子育て支援を見据えた助産師の役割を明らかにし、さらに役割を遂行するための具体策を検討することを目的に本研究に取り組んできた。

この論文の特徴は先行研究を社会学・社会福祉学・心理学等の分野と、保健分野の2つに大別し、特に保健分野では「小児保健研究」と「母性衛生」という2つの学会誌を創刊号からレビューした上で、千葉県八千代市での乳幼児を持つ母親612人を対象とした質問紙調査、八千代市での乳幼児を持つ母親30人に半構造化インタビュー調査、八千代市近郊の病・産院の質問紙調査を実施し、この3つの調査分析をもとに現代の出産・子育てにおける助産師の役割を明らかにしたことにある。

口述試験での質問は、第1に調査の重回帰分析

に関する指摘、第2に論文で登場する「指導」という用語の使い方について、第3に考察で導き出された結論が今まで言われてきたことのあたり前のことにとどまっているのではないかということであった。助産師の役割を考察する論文としてのオリジナリティについては論文の要約として本人からも書かれているものの、それでは子育て支援の総合的調査結果分析として物足りないというのがその質問の趣旨であった。また母親の意識と、病・産院の助産師の意識のズレがあったという調査結果に対し、利用者は家庭で使えるサービスを提供されていないと感じていることをふまえて、退院の指導を消費者主体で情報提供している施設とそうでない施設を調査してみるのも面白いのではないかといったご意見もいただいた。調査研究からの提言に新しい視点が見当たらない原因は、多種の調査と文献研究の結果、貴重な調査結果などについて十分な分析ができきれていないことにあると思われる。けれどもこれだけの膨大な調査をあきらめることなく全て反映した論文であることから、修士論文としては大変な努力をし、非常に高いレベルにあるという評価が多かった。今後、さらに調査の分析考察を加え、助産師による子育て支援のあり様に新しい知見が提案されることを期待したい。

(主査 森田明美)